

地域医療を担う皆さんへ

病院長 久保田 宏

病院医誌の巻頭言も、これが最後になりますので、これからの北・北海道の地域医療を担う皆さんに、三つのことを述べておきたいと思います。

一つは、「地域医療は何よりも人づくりから」ということであります。医療は、突き詰めていきますと、「人」と「人」との関係であります。いかにすばらしいハードが存在しても、ソフトが充実していなければ、ダメであります。反対に、ソフトが優れていれば、多少のハード不足は十分に補えます。このことは、最近の医療事故の傾向をみても、十分にうなづけることであります。地域医療も、まずは人づくりが重要であります。それには、当然のことながら、人を育てるシステムと予算（お金）が必要であります。北海道におきましては、地域医療を担う医師確保のための、総合医養成事業が今年の4月から緒につきました。幸いなことに、道庁は継続的に必要な予算を組んでくれることになっております。今後は、関係する皆さんの「やる気」ひとつにかかっております。どうか、道庁、へき地医療支援機構、三医大、センター病院そして地域の診療所が一体となって、地域に勤務する総合医は、「自分たちの地域で育てる」という気構えを持って、進んでいていただきたいと思います。医師以外の医療従事者も同じことであります。

二番目は、「地域住民の皆さんの要望に応える医療」の提供ということであります。地域医療の発展には、人づくりと並んで、住民の皆さんの要望に応じた医療サービスの提供は欠かすことができません。地域住民の皆さんの命を守る「最後の砦」は、第一線の診療所、そして、それをバックアップするセンター病院であります。あくまでも、患者さんの利益を尊重して、例えば、センター病院では、365日、24時間体制の救命・救急医療を、診療所では、往診、在宅酸素療法などを行えば、住民の皆さんから信頼されることは間違いありません。これが、よい「町づくり」につながっていくこととなります。

もうひとつ三番目は「他人依存でない、自主独立の気概を持つ」ということであります。この自主独立の気概を持つことは、地域医療にダイナミズムを与えます。自治体病院は、高度・専門・先進医療、救急医療、へき地医療など不採算部門を担わなければならないという不利な条件下にあります。ともすれば、私達は、国（厚労省）、道庁などへ支援を求めることが多いのですが、そのために、自らの努力や、工夫がおろそかになってはいけません。ハンディがあるとしても、常に、前向きに挑戦していく姿勢が大事であります。これからの地域医療は、それぞれの自治体や自治体病院が主体性を強め、予算を含めて、独自の判断で、展開して行くことが益々求められます。メリットが十分に見込めるものであれば、税金の投入についても、住民の皆さんは、必ず了解してくれますし、支援してくれます。厚労省や大学（医局）に依存するだけの、受身の地域医療では、先行きは暗いものになってしまいます。様々な困難と真正面から取り組み、格闘することが、明るい地域医療につながるものと私は信じております。

以上、私の反省を込めて、三つのことについて述べさせていただきました。最後に、名寄市立総合病院の発展を心からお祈りいたします。

平成15年2月28日